

妊婦さんに知ってほしい「妊娠オウム病」のこと

オブライエン悠木子、福土秀人

オウム病は、オウム病クラミジア (*Chlamydia psittaci*) という細菌に感染することで発症する、鳥由来の感染症（人獣共通感染症）です。インコやオウム、ハトなどをはじめとする全ての鳥類がこの細菌を保菌する場合があります、鳥の糞や分泌物を通じて人に感染します。健康な方が感染した場合は、軽い風邪のような症状で済むことがほとんどです。しかし、妊婦さんの場合は特別な注意が必要です。妊娠中は胎盤でクラミジアが増えやすく、免疫力も低下しているため、感染すると重症化しやすいことが知られています。このため、妊婦さんが感染した場合は「妊娠オウム病」と呼ばれ、一般的なオウム病とは区別して考える必要があります。

妊娠オウム病の特徴は、感染後の進行が非常に早いことです。発熱や頭痛、筋肉痛など風邪に似た症状から始まり、急激な経過で悪化し、流産や死産のみならず最悪の場合には母体が亡くなることもあります。日本では、オウム病クラミジア感染が報告されたのは7例、そのうち4例で母体が死亡（2017年2例、2022年1例、2024年1例）、5例で胎児が死亡しています。日本では2017年から2024年の7年間の妊婦死亡例は年間約21~33例（年間平均23例）で、このうちオウム病で亡くなったのは4例（年間平均0.5例）であり、決して少ない頻度ではありません（表1）。この病気の厄介な点は、診断が非常に難しいことです。妊娠オウム病は早期に適切な抗菌薬（マクロライド系やニューキノロン系）を投与すれば、母体と胎児の命を守ることができる感染症です。しかしながら、オウム病自体が稀な疾患であるため、医療現場では疑われることが少なく、問診で「鳥との接触歴」がないと見逃されがちです。また、一般の病院では検査が行えず、すぐに診断ができません。風邪症状の原因が特定できない場合には、妊娠オウム病の可能性を考えて治療することが重要です。

表1. 妊産婦死亡数及び率と妊娠オウム病の母体死亡数

| 年次 | 死亡数 | 死亡率 | 妊娠オウム病 母体死亡数 |
|------|-----|------|-----------------|
| 2017 | 33 | 3.40 | 2 |
| 2018 | 31 | 3.30 | 0 |
| 2019 | 29 | 3.30 | 0 |
| 2020 | 23 | 2.70 | 0 |
| 2021 | 21 | 2.50 | 0 |
| 2022 | 33 | 4.20 | 1 |
| 2023 | 23 | 3.10 | 0 |
| 2024 | - | - | 1 |

出典： https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2025.asp?fname=T05-28.htm

オウム病にはワクチンがなく、予防の基本は「オウム病クラミジアを保菌している鳥や動物との接触を避ける」ことです。そのため、妊婦さん自身やご家族がこの病気について正しく知り、妊娠中は鳥や動物に近寄らないなど、先ずはできる対策をすることが重要です。

- 妊娠中はペットのインコやオウムのそばに寄らない
- 野鳥に触れたり、糞のある場所を避ける

- ご家族もこの病気について理解し、感染リスクを減らす行動を心がける

しかし、実際には感染源が明らかでないケースも多く、野外で偶発的に感染する可能性があります。「インコを飼っている」「野鳥に触れた」など、鳥との接触歴がある場合には特に注意が必要ですが、気づかないうちに感染してしまうリスクがあることを知っておいてください。

妊娠オウム病は稀な感染症ですが、命に関わる重大なリスクを伴う感染症です。正しい知識と早期対応で、大切な命を守るために、社会全体での啓発が求められています。

【医療者の皆様へ】

妊婦が風邪症状で病原体を特定できない場合には、クラミジア感染症（オウム病）の可能性をご考慮ください。これまで国内で報告された妊娠オウム病の症例では、感染初期に発熱や頭痛などの感冒様症状が共通して認められており、その後急速に病状が進行するケースがみられました。突如意識障害が現れてから1時間半で亡くなった患者さんや、二次診療施設に搬送されてから6時間で亡くなった患者さんもいらっしゃいます。問診で鳥との接触歴がなくても、オウム病は発症します。稀な疾患ゆえに疑われにくい「妊娠オウム病」ですが、早期にマクロライド系やニューキノロン系など有効な抗菌薬が投与されれば救命できる疾患でもあります。

参考文献

1. 中條綾, 五月友友美子, 松山健, 吉岡増夫, 荻部正隆, 松原弘明 (2002) 妊娠後期にオウム病から罹患した妊婦から出生した女児例, 小児臨床 55, 895-898.
2. 清水可奈子, 西島浩二, 河原和美, 阪野陽通, 吉村芳修, 柳原格, 今村好章, 黒川哲司, 吉田好雄 (2018) オウム病による国内初の妊産婦死亡例, 産婦人科の実際 67, 445-450.
3. Katura D, Tsuji S, Kimura F, Tanaka T, Eguchi Y, Murakami T. (2020) Gestational psittacosis: A case report and literature review. J Obstet Gynaecol Res. 46, 673-677.
4. Yoshimura M, Shimizu K, Nakura Y, Kawahara K, Katano H, Motooka D, Takeuchi M, Nagamune K, Imamura Y, Nakamura S, Yasukawa K, Hasegawa H, Yoshida Y, Yanagihara I. (2022) A fatal case of hemophagocytic lymphohistiocytosis associated with gestational psittacosis without symptoms of pneumonia. J Obstet Gynaecol Res. 48, 3325-3330.
5. 服部葵, 吉田彩, 奥楓, 神谷亮雄, 黒田優美, 笠松敦, 奥田英孝 (2021) Massive perivillous fibrin deposition を呈し, 胎児死亡に至るも母体救命しえた妊娠オウム病の1症例, 日本周産期・新生児医学会雑誌, 57, 140-145.
6. 三塚加奈子, 間邊貴俊, 坂本奈緒子, 中嶋理恵, 柏木寛史, 林優, 後藤優美子, 落合成紀, 村山義史, 内山温, 石本人士, (2022) COVID-10 に類似した肺炎像とDICを呈した妊娠オウム病の1例, 日本周産期・新生児医学会雑誌, 58, 202 谷岡桃子, 杉井裕和, 兼森美帆, 伊藤裕徳 (2023) 病理解剖による検体保存で確定診断に至った妊娠オウム病の一例, 現代産婦人科, 72, 215-220.
7. NHK 長崎 NEWS WEB, (2025年6月22日)
(<https://www3.nhk.or.jp/lnews/nagasaki/20250612/5030024281.html>)